

# J.S.S.W NEWS

## 日本ソーシャルワーク学会通信

2025年4月15日

【発行責任者】 小山 隆

【編集責任者】 池田 雅子

## No.141

## Contents

|                                            |            |
|--------------------------------------------|------------|
| I. 巻頭言 ひとりはひとりきりか .....                    | 小山 隆 ... 1 |
| II. 日本ソーシャルワーク学会第42回大会案内（関西学院大学） ...       | 3          |
| III. 「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2025 in 山形」報告 ..... | 6          |
| IV. 2024年度第4回理事会報告...                      | 10         |
| V. 会員の声...                                 | 12         |
| 編集後記 .....                                 | 14         |

### I. 巻頭言

#### ひとりはひとりきりか

同志社大学 小山 隆

（日本ソーシャルワーク学会会長）

ずっと昔からわけもわからず好きな言葉があります。谷川鴈の「連帯を求めて孤立を恐れず」という言葉です。本来は学生運動の文脈で良く使われた言葉ですが、ポスト世代の僕は必ずしもその意味でなく、一般的な行動原理として「カッコいいな」と思っていました。ただ、その「連帯」と「孤立」の接続について、言い換えれば切替点（連帯を諦めて孤立を選ぶ？）はどうなっているのだろうと若い頃漠然と思っていた。

このことについて最近改めて考えさせられた本がありました。『一票の反対—ジャネット・ランキンの生涯—』（大藏雄之助・文藝春秋）という本です。1989年刊行と随分前の出版で、存在は知っていましたが未読でした。

ランキンは合衆国初の女性連邦議会議員（下院）です。真珠湾攻撃を受けて行われた、アメリカによる対日宣戦布告に対して、上下院で唯一反対票を投じた人として知られています。賛成388対反対1票でした。彼女は第一次世界大戦のドイツへの宣戦布告にも反対投票をしています。また大戦後もベトナム戦争反対運動の先頭にも立った筋金入りの人生を歩んだ人です。日本への宣戦布告に反対した時などは、議場を取り囲む暴徒から逃れるために（記者から逃れるためという記述もあります）電話ボックスに飛び込み扉を閉め、警備員が来るのを待たなければなかったといえます。（以下ほとんど、上記の本からの紹介であることをお許しください。）

とても魅力的な人物です。周りの凄まじい「批判」にさらされても「一人きり」でも発信し続け、「無駄と分かって」いても、それでも信念に従い行動することの大切さを教えてくれます。まさに、「連帯を求めて孤立を恐れ」ない行動は、昨今の様々な社会の状況に対しての自らのふるまいを顧みさせられます。

しかし、自分自身が四面楚歌の状況下で信念に基づく単独行動ができるような人間か？と自らに問いついた時、「そうありがたい」とは思っても断言できない自分がいます。孤立を恐れて迎合するのではないか。

そのようなことを考えているときに、同著の中で以下のような個所を見つけました。宣戦布告から2週間

ほど後の新聞のコラムの記事だそうです。少し長いですが引用させていただきます。

おそらく百人くらいの議員は彼女と同じことをしたかったであろう。一人としてそうする勇気がなかっただけのことである。当新聞は彼女が立場上とった考え方とは全面的に意見を異にする。だがそれにしてもなんとという勇気ある行動であろうか！

今から百年後にこの国で、道徳的義憤に基づく勇気が、真の勇気が称えられる時、信念のために愚かしくも堂々と立ち上がったジャネット・ランキンの名前が、その業績の故にではなく、その行動の故に、記念の銅像に刻まれるであろう。(大藏 39 ページ)

当時、彼女がこの記事を見たかどうかはわかりませんが、あの反対行動は孤立した単独行動ではあるが同時に、このような人々とともに（ある意味で）連帯していたのだと気づきました。実は 388 対 1 の採決時には 41 人の欠席者がほかにおり、その中には自己の信念と選挙民の意向の板挟みにあって、採決時にこっそり議場を抜けた議員もいたそうです。また、採決後は当然非難や脅迫の手紙が殺到しましたが、地元からの手紙の 10 通に 1 通は彼女の行動を支持するものだったそうです。

たった一人の行動、ほとんどの人の批判・攻撃という側面に焦点を当てた時、事態を乗り切れる自信は僕にはありません。しかし、「勇気のない人」やほんの 1 割の人と繋がれていると感じることができた時、答えは違ってくるかもしれません。

連帯と孤立は矛盾しどこかで選択しなければならないのではなく、一直線上に繋がっており、自分がそのことに気づくかどうか大切なのではないかそのように感じさせられたことでした。

## Ⅱ．日本ソーシャルワーク学会案内第 42 回大会 (関西学院大学)

①日時：2025 年 7 月 5 日（土）・6 日（日）

②場所：関西学院大学上ヶ原キャンパス G 号館

### ③大会テーマ「インクルージョンと反抑圧的实践」

ソーシャルワークの中でも理念として広く受容されてきているインクルージョンについては、「ソーシャルワークのグローバル定義」の中でソーシャルワークの中核をなす原理として謳われている「多様性尊重」を実現させていくために、その実践的な理念としての意義は失われていない。しかし、一方でインクルージョンが多様性の背後に存在する抑圧や差別（それらは新自由主義の中で一層深刻になってきている）を見過ごし、それを温存したまま既存の社会体制の中に「包摂」するだけであるという批判もなされている。

こうした中で、近年、日本のソーシャルワークの中で注目されるようになっていく「反抑圧的实践」（AOP）は、新自由主義の潮流に対抗する形でイギリスにおいて登場し、ソーシャルワークが見過ごししてきたとされる抑圧や差別構造に注目し、社会の変革の実現にむけて理論化が進められてきた。しかし、それを実践において日本のソーシャルワークに導入することについては様々な課題があることも否定できない。

今大会では、この AOP に注目する一方で、これまでソーシャルワークが重視してきたインクルージョン、あるいはその近似の理念との整合を理論的に如何に果たして行くべきなのかを考える契機にしたい。また、日本において AOP を実践的に展開していくことの意義や課題についても意見交換できる場になればと考える。

### ④スケジュール

○1日目 7月5日（土） 午後

13:00～13:30 開会式 会長、実行委員長、後援団体等挨拶

13:40～14:50 基調講演

15:00～17:30 学会企画

18:00～ 情報交換会

○2日目 7月6日（日）

9:00～11:00 自由研究報告（会員および日本ソーシャルワーカー連盟会員）

11:10～12:00 ポスター報告（研究報告・実践報告）、交流企画

12:30～13:30 総会

13:40～16:10 大会企画

16:15～16:25 閉会式

### ⑤基調講演趣旨

『脱「いい子」のソーシャルワーク：反抑圧的な実践と理論』の著者の一人であるトロント大学の坂本いづみ先生より、AOPの先進国とでもいべきカナダでの現状と課題を紹介いただき、日本での展開を議論する際の参考にさせてもらう。またインクルージョンと AOP の融合について、坂本先生のカナダでの体験

を踏まえてお考えを示していただく。

## ⑥学会企画

交差性（インターセクショナリティ）は、「現代社会の最重要概念」（下地 2021）＊と指摘されるように、この概念のもつ有用性や意義のインパクトは学問領域・テーマを超えて広がりつつある。交差性とはブラック・フェミニズムの理論に由来するが、コリンズ&ビルゲ（2021）＊＊によれば、「交差する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や個人の日常的経験にどのように影響を及ぼすのかについて検討する概念である。分析ツールとしてのインターセクショナリティは、とりわけ人種、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、ネイション、アビリティ、エスニシティ、そして年齢など数々のカテゴリーを、相互に関係し、形成し合っているものとして捉える。インターセクショナリティは、世界や人々、そして人間関係における複雑さを理解し、説明する方法である」。

ソーシャルワークとの関連では、単一の要因ではない複雑かつ多層的な構造的問題を読み解いていくための分析概念としての有用性、可能性をもった概念装置といえる。複合的な困難を抱えたクライアント支援において、生活困難を構造的に理解する際に力を発揮することになる。

ただ、交差性の視点の重要性は理解できるものの、ソーシャルワーク実践のなかでどのように具体的に应用していくかについての知見は十分ではない。そこで、本シンポジウムでは交差性という概念の系譜や意義を理解したうえで、ソーシャルワークの実践事例のなかで交差性の視点から何をどう読み取るのか、どのような支援が必要となってくるのかを、シンポジストとフロアがともに検討する場とする。

### (1) 概念説明：「交差性とは何か、その系譜も含めて」

京都産業大学 藤高和輝先生 事例提供

### (2) 現場の方からの事例提供

NPO 法人ふるさとの会 千葉翼台東事業部長

台東区の女性用日常生活支援住居施設・ふるさと日の出館 中村恵子施設長

### (3) ディスカッション

(SW の教育・研究の立場から) 東京通信大学 加藤慶先生

(交差性を生きる当事者／障害学と社会福祉学の立場から)

立命館大学生存学研究所客員研究員・社会福祉士 河口尚子先生

(司会) 横山登志子 札幌学院大学、本学会理事

(コメンテーター) 日本社会事業大学 ヴィラーク・ヴィクトル先生

## ⑦大会校企画（シンポジウム・パネルディスカッション）趣旨

基調講演を受ける形で、日本における AOP への期待と課題、インクルージョンと AOP の融合についてどう考えるかを各パネリストにお示しいただき、会場も交えて討論できる場にしたい。

コーディネーターとして、AOP を学びにカナダに留学された日本福祉大学の太谷京子先生から、パネルディスカッションの趣旨説明と進行を担っていただく。

パネリストとしては、以下の方々にそれぞれのお立場で、AOP への期待と課題、インクルージョンとの融合について語っていただく。

### ○研究者の立場

・大阪公立大学 児島亜紀子先生

・明治学院大学 宮崎理先生

### ○当事者（障害者）・実践の立場

- ・DPI 日本会議 佐藤聡事務局長
- ・NPO 法人 CHARM 青木理恵子事務局長

○コーディネーター 日本福祉大学 大谷京子先生

## ⑧研究報告（口頭報告・ポスター報告）と実践報告（ポスター報告）

従来の大会では、研究報告は会員および共催団体による自由研究報告（登壇による口頭）のみであったが、より多くの報告者を確保する意味で、ポスター報告を導入する。ポスター報告は、研究報告と実践報告の二本立てとする。詳細は以下の通り。

### 1. 研究報告

登壇による口頭発表、ポスター発表の2つ。前者はいわゆる「自由研究報告」であり、従来通り分科会において口頭で報告し、質疑応答が行われる。後者は、決められた時間内において来場者にポスターの内容を説明、あるいは質問を受ける形で実施する。本学会員、日本ソーシャルワーカー連盟会員のいずれかとする。

### 2. 実践報告

ソーシャルワークに関する実践報告（研究報告との線引きが難しい場合は、報告者の判断に委ねる）。ポスター報告形式のみ。決められた時間内において来場者にポスターの内容を説明、あるいは質問を受ける形で実施する。本学会員、後援団体の会員のいずれかとする。

## ⑨交流企画（他領域交流企画）

より多くの参加者を確保する意味でも、また他専門職、他業種との交流を通して参加者の知見を広げる意味でも、本学会員以外（他学会や本学会の後援団体の会員など）から、研究や実践の報告を募り、ポスター報告形式で、ソーシャルワーク研究者や実践者との意見交換の場とする。

応募資格は特に設けないが、発表者（セカンドオーサー以降も含め）が参加費用を収め、交流企画開始時に会場にすることが条件になる。

## ⑩学生交流企画

福祉分野を学ぶ高校生や学部レベルの学生による研究、実践発表の場を設けることを通じ、ソーシャルワーク・福祉教育の増進や未来のソーシャルワーカー、研究者の育成に貢献する。

（対象者）

高校生 必ずPI（Principal Investigator：研究責任者）として高校教員が発表者とともに名を連ね、当該教員は当日発表会に参加すること

大学生 発表申込に当たっては、所属する大学の教員の推薦を受けること

参加費：1,000 円（高校の研究責任者も含む）

## ⑪後援団体について

### ○兵庫県

兵庫県社会福祉士会・兵庫県精神保健福祉士協会・兵庫県医療ソーシャルワーカー協会

兵庫県介護支援専門員協会・兵庫県社会福祉協議会・西宮市社会福祉協議会

### ○全国

日本ソーシャルワーカー協会・日本社会福祉士会・日本精神保健福祉士協会

日本医療ソーシャルワーカー協会・日本ソーシャルワーク教育学校連盟



## Ⅲ. 「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2025 in 山形」 報告

日 時：2025 年 2 月 23 日（日）13：00～17：00

（対面とオンラインとのハイブリッド形式）

対面会場：山形テルサ 大会議室（〒990-0828 山形県山形市双葉町 1 丁目 2-3）

テ ー マ：「住民主体のまちづくり」を先駆的に進めた山形県市町村における地域住民のエンパワメント  
と新しい包括的支援システムの構築  
～「山形会議」65 年後に展望するソーシャルワーカーの役割

仙台白百合女子大学 白川 充

（学会理事 / 研究推進第二委員会、第三委員会）

### はじめに

研究推進第三委員会の社会貢献推進事業の一環として、各地域のソーシャルワーク関係団体との連携・協働の下で開催してきたソーシャルワーク・コラボセミナーは、2024 年度で 11 回目を迎えました。十数年前、今は亡き岩間伸之先生とこの企画の原案をつくった者として、感慨深いものがあります。

今回のセミナーは、大島副会長のリーダーシップのもと、その準備に 1 年をかけ、共催となる山形県社会福祉協議会、山形市社会福祉協議会と丁寧な調整を行ってまいりました。各地域のソーシャルワーク関係団体との「連携・協働」こそ、この企画のポイントであり、その点でも成果のあるセミナーとなりました。

また昨年度と同様に対面とオンライン配信とのハイブリッド形式で開催しました。事前の参加登録者数は 152 名、会場参加者は参加登録者 44 名、参加登録者を除く登壇者や運営スタッフが 13 名、Zoom 参加者 75 名、計 132 名を集めて開催することができました。セミナーの開催にあたり、ご支援・ご協力いただきました皆様には、この場を借りて心より感謝申し上げます。

### 1. セミナーの概要

セミナーのテーマは、『住民主体のまちづくり』を先駆的に進めた山形県市町村における地域住民のエンパワメントと新しい包括的支援システムの構築～「山形会議」65 年後に展望するソーシャルワーカーの役割』です。準備段階でテーマが長すぎるのではないかという意見もありましたが、この長いテーマこそ今回のセミナーの特徴です。テーマの趣旨は以下のとおりです。

「山形会議」（1960 年）は、社会福祉協議会（以下、社協とする）75 年の歴史の中で、「住民主体の原則」を「現場の実践」から検証し社協基本要項に発展させた社協創生期の全国会議であり、社協発展の礎のひとつとして知られています。このセミナーでは、「山形会議」65 年後の今日、求められる「住民主体の活動」と地域ソーシャルワーカーの役割を、改めて山形県市町村の「現場の実践」から検証し、今後の活動の展望を見出すことを目的としました。

### 《プログラム》

13：00 開会挨拶 小山 隆 氏（日本ソーシャルワーク学会 会長 / 同志社大学）

13：10～14：10 基調講演

「包括的支援システムの構築と地域を基盤とした新たなソーシャルワークの展開を探る」

宮城 孝 氏（法政大学 現代福祉学部 教授）

14：20～16：50 基調報告 & シンポジウム

基調報告「山形県内社協の活動実践とソーシャルワークについて」

奥山伸広 氏（山形県社会福祉協議会 事務局次長）

シンポジウム

「山形県市町村における地域住民のエンパワメントと新しい包括的支援システムの構築

～山形市社会福祉協議会・酒田市社会福祉協議会・上山市社会福祉協議会が支援する実践報告から～」

【登壇者とテーマ】

- (1) 住民と共に進める個別支援と地域支援～山形市社協の活動をととして

佐藤貴司 氏（山形市社会福祉協議会 事務局長）

- (2) 地域の話し合いから生まれた支え合い活動『よろずや琢成』のしくみと運営について

阿部直善 氏（よろずや琢成運営委員）

大川 慎 氏（酒田市社会福祉協議会 地域福祉課係長）

- (3) 中川福祉村における実践とソーシャルワーカーの役割

鏡 洋志 氏（上山市社会福祉協議会 事務局長）

那須裕悌 氏（社会福祉法人鶴翔会 こまくさの里 施設長）



基調講演（宮城 孝先生）



基調報告 & シンポジウム 会場の様子



基調報告 & シンポジウムへのコメンテーター

## 2. セミナー参加者の感想

### ソーシャルワーク・コラボセミナー 2025 in 山形に参加して

東北公益文科大学 小関 久恵

本セミナーには企画段階から実行委員として参加させていただき、当日はコメンテーターを仰せつかった。当日は、まず法政大学・宮城孝先生より全国の動向を踏まえつつ山形県の人口・社会構造と福祉課題について、長年研究フィールドとされている山形県鶴岡市の事例等もご紹介いただきながら、今後の地域社会の変化とそれに対応する地域を基盤としたソーシャルワークのあり方について講演いただいた。その後、基調報告とそれに続くシンポジウムが行われ、山形県社協及び県内の市社会福祉協議会3か所（山形市・酒田市・上山市）より活動実践が報告された。

「山形会議」については、私自身山形県内の大学に所属していながら、本セミナーの企画を機にしっかりと事実認識をしたという大変お恥ずかしい状況で、当時の山形県内においてどのような背景と活動のうねりがあったかをこの機会に事前に学びセミナーに臨んだ。山形会議に参加し、その後山形県社協の事務局長をされた渡部剛士氏によれば、当時のソーシャルワーカーたちは住民自身が問題に気づき動き出すことを支援する「火つけ役」を自称し、地域の声なき声を聞くために自転車に乗って地域を駆け回ったという。そして「オルガナイザー」となったのがワーカーだったと表現する。その際重要だったのは住民参加を原則とする地域診断であり、その過程で組織化がされ、具体的な生活課題に裏付けられたソーシャルアクションにつながる実践（母ちゃん9時運動など）が確かにそこにはあった。

酒田市社協の「よろずや琢成」と上山市社協の「中川福祉村」は、いずれも山形会議当時のワーカーが目指した実践と通底するものがあり、今日の前で起きている問題にそこに住まう人々とともにそれぞれの地域特性を活かして向き合う具体的な実践であった。また、山形市社協による報告では、多岐に渡る事業をミクロ・メゾ・マクロを横軸、事業主体を縦軸とした「ソーシャルワーク実践分析表」によって分析した。ワーカーとして実践をふりかえり、さらに取り組むべきことを明らかにするうえで有効かつ重要な一步であると感じた。

以上のように現在も山形県内には住民主体の実践があることが確認された一方で、「住民主体」を冷静に検証する役割もワーカーにはあるのではないかと感じたところである。コメンテーターである東北福祉大学の石氏による「親密圏」「公共圏」を意識したまちづくりについてのコメントや、私自身も個別支援と地域支援をつなぐうえでソーシャルワークが関与すべきメゾレベルにおけるグループワークの見直し・捉え直しについてコメントをさせていただいた。いわゆる「中間集団」が力を失っているこの時代における「住民主体」とは何から始めるべきなのか、冷静に検討する役割もソーシャルワークには求められると考える。私自身も大学に所属する立場として何ができるかを引き続き考えていきたい。

注) ふくおか・社協コミュニティワーカー協会編（2009）『「住民主体」のまちづくりを現地（山形）で学ぶ研修会』報告書を参照。研修会は2008年12月5日～7日に実施された。



日本ソーシャルワーク学会・山形県社会福祉協議会・山形市社会福祉協議会が共同で主催した「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2025 in 山形」に出席し、ソーシャルワーカーの専門性、地域福祉の原点に立ち返ることのできる学び多きセミナーであった。今回のセミナーで主として取り上げられた「住民主体」は、現在の「新・社会福祉協議会基本要項」にも位置づけられており、社協の進める地域福祉の基盤であるともいえる。かつての「山形会議」（1960 年）を経て、1962 年に策定された「社会福祉協議会基本要項」には、現場の実践から「住民主体の原則」が打ち出され、現代まで広く地域福祉の理念として展開されている。

「山形会議」から 65 年、「住民主体のまちづくり」を先駆的に進めてきたこの山形の地で、今回山形市社協、酒田市社協、上山市社協の 3 つの社協から実践報告が行われた。山形市社協では、一人の「個」が抱える問題を「地域」の問題と捉え、地域住民と協働しながら、相談の拠点の整備や個別支援から地域支援までの仕組みづくりを行ってきた。酒田市社協は、住民が抱えるちょっとした困りごとを住民同士の活動を通して支え合う「よろずや琢成」の仕組みについて説明いただき、地域づくりや参加支援といった重層的支援体制の一つとして実践されている活動であった。上山市社協における「中川福祉村」では、社協と住民、福祉施設等が連携して「福祉のまちづくり」を進めた実践事例であり、「共に生き、共に行動する活動」として魅力ある村づくりであると感じた。

法政大学現代福祉学部の宮城孝教授は基調講演の中で、「今後さらに複合化な課題を抱える地域社会では、ソーシャル・サポート・ネットワークが重要である」と述べている。すなわち孤独孤立の問題や地縁組織の弱体化等の課題に対して、ソーシャルワークの介入度を高めるとともに、住民の受援力を高めることも今後の包括的な支援体制を進めるうえでの一つの要点であると学んだ。

私は今回のコラボセミナーを聴講し、改めて地域福祉は「住民のニード」が原点であり、住民主体が「山形会議」で打ち出されてから 65 年が経過する現在に至るまで、社協が地域住民の声を聴くことを大切に、地域住民の立場に立って地域福祉を展開してきたのだと学ぶ機会となった。また、地域や住民の持つエンパワメントの構築におけるソーシャルワーカーの役割を再認識し、宮城教授の「福祉はまちづくり」の意義を考え直すことができた。長きにわたり住民主体の地域福祉を進めてきたこの山形の地で、私も一社協職員としてこれまでの歴史と今後の地域福祉を見据え、継承していく使命を持って今後の業務に努めていきたいと感じたセミナーであった。

## Ⅳ．「2024 年度第 4 回理事会」報告

○日時：2025 年 3 月 9 日（日）17 時 00 分～18 時 10 分

○場所：対面会議・明治学院大学白金キャンパス 本館 4 階 1403 教室

○出席・欠席者一覧

| 役職  | 氏 名         | 所 属                  | 出欠  |
|-----|-------------|----------------------|-----|
| 会 長 | 小山 隆        | 同志社大学                | 出   |
| 副会長 | 空閑 浩人       | 同志社大学                | 出   |
|     | 和気 純子       | 東京都立大学               | 出   |
|     | 大島 巖        | 東北福祉大学               | 出   |
|     | 保正 友子       | 日本福祉大学               | 出   |
| 理 事 | 久保 美紀       | 明治学院大学               | 出   |
|     | 岡田 まり       | 立命館大学                | 出   |
|     | 木村 容子       | 日本社会事業大学             | 出   |
|     | 川島 ゆり子      | 日本福祉大学               | 出   |
|     | 荒井 浩道       | 駒澤大学                 | 出   |
|     | 大谷 京子       | 日本福祉大学               | 出   |
|     | 白川 充        | 仙台白百合女子大学            | 委任状 |
|     | 横山 登志子      | 札幌学院大学               | 出   |
|     | ヴィラーク・ヴィクトル | 日本社会事業大学             | 委任状 |
|     | 志水 幸        | 北海道医療大学              | 出   |
|     | 池田 雅子       | 北星学園大学               | 出   |
|     | 渡辺 裕一       | 武蔵野大学                | 委任状 |
|     | 佐藤 俊一       | NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば | 出   |
| 監 事 | 福山 和女       | ルーテル学院大学             | 委任状 |
|     | 黒木 保博       | 長野大学                 | 委任状 |
| 庶 務 | 小野セレストア摩耶   | 同志社大学                | 出   |

### Ⅰ．各委員会より活動報告

#### 1. 研究推進第一委員会

- ・学会編集委員会より順調に査読が進んでおり、予定通り学会誌を発行できる旨の報告がある。
- ・学会賞については、候補の論文・候補の書籍を挙げているところで、今年の 5 月の第 1 回理事会にかける予定。
- ・研究奨励委員会については、2025 年 5 月末日（必着）を締め切りとして応募を行っている。

#### 2. 研究推進第二委員会

- ・本日、明治学院大学で研究セミナーが行われ、対面 40 名、オンライン 204 名の申し込みがあり、実際の参加者はオンライン 115 名、対面は 30 名くらいであった。
- ・第 42 回大会について。スケジュールと詳細について提案をいただいたので、今回の理事会で検討して返すことになっている。その後、あり方について検討。
- ・第 43 回大会については、現在のところ日本社会事業大学より内定をいただいている。
- ・3 月 15（土）の午後にオンラインで第 6 回公開研究会「多様性と文化的コンピテンスにもとづくソーシャルワークのあり方に関する研究会」を実施する。

#### 3. 研究推進第三委員会

- ・出版・教材開発班からは、実践研究支援ワークショップを実施した旨、3 月 30 日にフォローアップ研修が実施される旨が報告された。

- ・社会貢献推進班からは、2月23日にソーシャルワークコラボ山形が実施された旨が報告された。
- ・2025年度は愛知県の日本福祉大学東海キャンパスにて、コミュニティソーシャルワーカーとスクールソーシャルワーカーの役割について焦点化してとりあげる。

#### 4. 国際委員会

- ・特になし

#### 5. 研究倫理委員会

- ・特になし

#### 6. 外部組織への参加

- ・ギースが3月16日にシンポジウムを開催するため、フェイスブックでチラシを公開した。
- ・ソーシャルケアサービス従事者研究協議会では、賀詞交歓会を開催しているが本学会では参加していない。

#### 7. 総務委員会

- ・メールマガジンの2024年12月(134)号～2025年3月(137)号を発行した。
- ・ニュースレターの第140号を発行した。
- ・岡本先生ご遺族様への弔電を2024年12月18日付で打った。
- ・日本女子大学で実施したアベ・タッセ先生による基調講演の後援を行った。

### Ⅱ. 会員の動向（前回理事会 2024 年 11 月 25 日以降～ 2025 年 3 月 5 日現在）

1. 入会者 5 名
2. 退会者 15 名
3. 3 年間滞納者 5 名（2025 年 3/31 までに支払がない場合定期退会処理）

### Ⅲ. 次回理事会（2025 年度第 1 回・第 2 回）日程（案）について

- 第 1 回 正副会長会議 5 月 11 日（日）17：00～・理事会 5 月 18 日（日）17：00～ Zoom  
第 2 回 正副会長会議 6 月 15 日（日）17：00～・理事会 6 月 29 日（日）17：00～ Zoom  
第 42 回大会 7 月 5 日（土）・6 日（日）関西学院大学

## V. 会員の声

### 入会にあたって

明治学院大学大学院 佐伯 賢

このたび、ソーシャルワーク学会に入会しました佐伯賢と申します。明治学院大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士前期課程に所属しています。

私は「構造的不正義を問題化するソーシャルワークの理論的視座とは何か」という問いを軸にして研究を行っています。特定の認識論的枠組みが何を浮き彫りにし、同時に何を覆い隠してしまうのかという問題に取り組んでいます。主に関心がある2つの領域は、歴史的不正義をめぐるポリティクスと、「異常なもの」を構築し抑圧する規範的暴力のメカニズムです。批判的ソーシャルワーク理論に分類される様々な理論と、関連する他の学問領域の議論に触れながら、これらのテーマがソーシャルワークにとって重要な主題として認識され、批判的に議論されることが可能になるような枠組みの構築に取り組みたいです。学会報告等の機会を通じて、ソーシャルワーク研究における批判的な議論の蓄積に貢献していきたいと思っていますので、みなさまどうぞよろしくお願いいたします。

### 入会にあたって

東北公益文科大学 小関 久恵

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会させていただきました小関久恵と申します。東北公益文科大学公益学部公益学科地域福祉コースで社会福祉士養成を担当しております。公設民営の大学として2001年に開学した本学に、社会福祉士養成課程が本格始動する2006年に着任し振り返れば18年が経ちました。「大学まちづくり」を目指すなど地域に根差した大学としての特徴があることから、私自身も教育・研究フィールドの地域住民の皆様のお力を借りながら、中山間地域における地域福祉やコミュニティソーシャルワークに関する教育実践・研究活動を行っております。学会員の皆様の幅広い実践・研究から学ばせていただきながら、より一層精進して参りたいと存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。

### 入会にあたって

弘前学院大学 小川 幸裕

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会いたしました、弘前学院大学社会福祉学部の小川幸裕と申します。現在は、同大学にてソーシャルワークに関する講義および演習を担当しております。研究は、独立型社会福祉士のソーシャルワークに関する検討をテーマに取り組んでおります。これまで、アンケート調査やインタビュー調査を通して、独立型社会福祉士の実態把握、活動の強みや課題の整理を行ってまいりました。現在は、独立型社会福祉士のアドボカシー機能に着目し、量的調査と質的調査の両面から、アドボカシー活動の構造の可視化に取り組んでおります。具体的には、独立型社会福祉士の成年後見活動におけるアドボカシー活動のプロセスやモデルを明らかにしたいと考えています。学会では、会員の皆様とともにソーシャルワークの実践と理論の発展に貢献させていただくとともに、学会発表や論文投稿により研究を深め、学会の発展にも貢献させていただければと考えております。学会活動を通して研究教育能力の向上を図り、津軽地域におけるアドボカシー活動を推進するソーシャルワークの質向上、そして権利擁護支援体制の整備に寄与

したいと考えております。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

## 新入会にあたり

秋田看護福祉大学 平林 朋子

この度、入会させていただきました平林朋子と申します。34年間都内の急性期（緩和ケア病棟含む）、回復期リハビリテーション病棟、老人保健施設で医療ソーシャルワーカーとして働いてまいりました。勤務をしつつ、経営学修士号、福祉社会学修士号を取得し、現在は帝京科学大学医療科学研究科博士課程に在籍しております。2025年4月からは、秋田看護福祉大学の医療福祉学科で後進の教育に当たることになりました。研究テーマはソーシャルワーカー業務構造（特に医療分野）について中心として行っております。実務経験の中で疑問に思った多くの事象に対し社会的見地から捉えなおしていきたいと考えております。また、2024年能登半島地震の際、日本医療ソーシャルワーカー協会からの派遣として、1.5次避難所での活動経験を得たことから、災害時のソーシャルワーカー業務についても関心を持っております。かなり年齢のいった新入会者ではありますが、どうかよろしくお願い申し上げます。



---

## 編 集 後 記

---

新年度を迎えました。希望に燃えた4月ですが、南海トラフ地震が起こった場合の被害予想がニュースで流れ、やるせない気持ちになりました。被害を最小限におさえるとともに、日本は世界有数の地震大国、高齢化も進んでいます。そこで乗り越えてきた知恵を世界に発信できることを強みと捉え、そこでのソーシャルワーカーの働きを考えたいものです。

今年のSW学会全国大会は、「インクルージョンと反抑圧的实践」をテーマに関西学院大学で開催されます。万博の関係で宿が取りにくくなるので早めにお申し込みください。

(M・I)

### 【日本ソーシャルワーク学会事務局】

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル 2F (株) ワールドプランニング内

TEL : 03-5206-7431 FAX : 03-5206-7757

E-mail : [jsssw@worldpl.co.jp](mailto:jsssw@worldpl.co.jp) <http://www.jsssw.org>



